

稚児説話の研究

—「稚児落とし」「稚児が淵」をめぐる—

杉 岡 尚 子

第一章 伝説における「稚児が淵」「稚児落とし」

九州の彦山を始め全国各地に、「稚児落とし」「稚児が淵」と呼ばれる、稚児が身を投げて、或いは谷に捨てられて命を落としたことが、地名由来伝説として語られている土地がある。

「稚児が淵」伝説には、稚児物語的なものと人柱伝説的なものの二種類がある。稚児物語的な伝説について柳田國男は、姥が井伝説などと同種のものとし、僧侶と稚児、乳母と子供の組み合わせが、「童男童女を戸として神を降ろした旧慣を語るもの」とし、郡司正勝は、「一連の稚児犠牲の痕跡」であるとす。また、人柱伝説は一般的に、神子的な性格を持つ者が水神の心を宥めるため犠牲となり水底に沈められるというものであるから、この二種類の「稚児が淵」伝説は、神の使いとしての稚児が犠牲となって水底に沈め

られるという、同一のモチーフを語るものである。以上のことを総合すると、「稚児が淵」伝説は、神のヨリマシとしての稚児が水を抑えるという、童子と水神に対する信仰を基に人柱伝説的に語られ、やがてそれが、ヨリマシとしての性格を強調するために僧侶などと組み合わせられ、さらに稚児と僧侶という組み合わせに対する連想から、稚児物語的な性格を帯びるようになったと考えられる。

一方「稚児落とし」伝説は、謡曲『谷行』と非常に類似している。『谷行』は、入峯の途中病に罹った者を谷へ落とし生き埋め（石小詰）にするという、山伏の習俗を描いたもので、ここで谷に落とされる稚児松若は、不動明王の力で蘇生させられることになるが、これは修験道の入峯修行が擬死再生の思想を基に行われていることのアラわれと見られよう。「稚児が淵」伝説と区別し得る独自性を持った「稚児落とし」伝説は、福岡県背振山と彦山の二箇所に残っており、これらは『谷行』の一部分をそれぞれ語るものである。このことから「稚児落とし」伝説は、修験の「谷行」という刑罰と、それを支える擬死再生思想を背景としたものであると考えられる。

第二章 文学作品における「稚児が淵」「稚児落とし」

「稚児が淵」伝説と文学作品とを絡めて考えると、伝説——『秋夜長物語』——「愛護若」という、一つの流れを見出すことが出来

る。「稚児が淵」伝説は、稚児の恋愛、入水、水神との関わりという、三つの要素により構成されていた。それが『秋夜長物語』へと継承されたとき、新たな要素として、天台密教や修験との関わりや、神仏への稚児の転生が付加された。そしてこの流れは、これらの要素を全て備えた説経『愛護若』へとゆきつくのである。稚児の入水はこの流れの中で、修験道における捨身行としての性格を濃厚に持たされ、神仏への転生は、結果として物語の中に日吉山王の縁起を内包することとなった。また、稚児の入水に伴って現われた「百八人の入水」は、浄土教的な宗教世界をも、この流れに付加することになる。伝説は『秋夜長物語』へと文学作品化されたとき、天台宗という世界の中に内包され、それは『愛護若』へと説経化されることにより、説経というものの性格上、天台宗世界にのみ留まることは出来なくなる。説経が広く一般大衆を享受者として持っていることにより、『愛護若』は、天台宗、修験道世界の痕跡を自らの中に内包しながら、限定された世界から抜け出し、より大きな拡がりとして一般性をもって語られることになったのである。

「稚児落とし」伝説は、母子神信仰を根本に持ち、護法童子などの童子信仰に基いた擬死再生の入峯思想を背景としている。この伝説は、入峯の際の刑罰「谷行」を伝説化したものであり、その点で、謡曲『谷行』とは表裏一体の関係にある。また、山中に捨てられた児が、外界と隔絶されて虎狼野干に守護されながら成長し、拾われ

ることで人間界と再び接触し、超人的になるという捨て童子譚は、修験道における入峯思想を最もよく反映したものである。熊野の若一王子、伊吹童子、弁慶、保昌、役行者、廊御子、慈童などの捨て童子達は、美しい童子、荒々しい童子、しおれたる稚児という、三種類の姿で描かれるが、これらは、中世に描かれた護法童子の姿と重ね合わせることが出来る。鬼神として描かれていた護法童子は、善悪を併せ持つという性格から、やがて美しい童子と荒々しい童子とに分裂する。そして荒々しい童子は特定の護法童子の姿として固定されてゆき、美しい童子はより一般的護法童子の姿として認識され、次第に稚児物語的な稚児の風情を持つようになった。中世に描かれる護法童子は、このようないくつもの姿が混在している状態であった。護法童子は修験道における根源的な崇拜対象であり、山という母の胎内で修行する修験者の姿でもある。修験者にとって入峯とは母胎回帰であり、擬死再生そのものである。このことから、捨て童子譚は、入峯思想の中に稚児物語的な要素を部分的に入れながら、入峯及びその思想をそのまま説話化したものであると考えられる。つまり、「稚児落とし」伝説と謡曲『谷行』、そして役行者や伊吹童子をはじめとする捨て童子譚とは、一本の木から生じた枝のような関係として捉えることが出来るのである。

『聊齋誌異』研究

藤 嶺 彰 康

清初の怪異小説『聊齋誌異』が収める、全十二巻に互る五〇三篇の説話のうち、ひとまず焦点を冥界譚に当てながら以下の見地に立脚し、論を展開することにした。まず、『誌異』に記録される冥界を天上・地下・水下の三界に分類し、なおそれぞれが内包する問題点を多角的に捉えて言及していくというものである。

すなわち、第一点は、天上界における天帝（上帝）の形態を如何に位置付けるかということから始まる。これは「聶小倩」（巻二）、「巧娘」（巻二）、「珊瑚」（巻十）など、先秦の『詩経』・『楚辞』文学に見受けられるような、ごく初期的な天帝信仰に根差した条例はもとより、『酆后』（巻七）での天帝が天上界での転生を司っていたことを示す条例や、『于去惡』（巻九）にみられる新鬼に科挙試を課し、冥界の神官に採用していこうとする姿勢など、一方では原始的な信仰対象として、或いは一方では、単なる民間信仰の域から脱して、陽世の投映を積極的に行おうとする創作文学の粋が表象されたのもあったりしたわけである。

また天上界に関してこれとは別の今一つの観点を、説話内容としての天上界の描写とその往来にまつわる困果に置くことにした。概して『誌異』では天上界の描写が簡略に過ぎ、そして、こうした気風がどうした事情から生じたのかを、一般庶民側から捉えた天界観と併せて考えるならば、どうやらこれには天界そのものを構成する神々の誕生に深い関わりがあるようで、この点を数例の説話引用を行いつつ考察を加えた。

第二点としては、さまざまな表記に託される地下冥界の世界観を管見することを目的とし、便宜上、対象とする、冥界を指し示す語彙を明確に含む七十六篇を次のごとく分類した。

- ① 語頭に「冥」を付すもの。（四十九）
 - ② 語頭に「陰」を付すもの。（十七）
 - ③ 「地下」と書き表すもの。（十三）
 - ④ 語に「幽」を含めるもの。（十二）
 - ⑤ 語に「泉」を含めるもの。（十七）
 - ⑥ 「地獄」に類するもの。（十三）
 - ⑦ 「泰山」に類するもの。（六）
 - ⑧ 固有名詞により表されるもの。（二）
- 下段の数字はそれぞれの語彙を収録する説話数であるが、一つの説話が分類語を重複して用いるため、ゆうに七十六を越え、その総計は百二十九を数える。

さて最初に①類であるが、これは広く「あの世」を指す語群で、多く「冥」という表記を取って複合語を形成するものであった。②類の「陰」とも同様のことが言える。③類になると単に「あの世」を指し示すだけでなく、「地下世界」から敷衍して「墓穴」の意が加えられる。こうした語義の多重性は、④類の「あの世」・「九層の地獄」・「黄泉」等に現れる通り乱脈を極めた世界観ではあったが、『誌異』がすべて松齡の独創に拠るものではなく、専ら四方の文人らにその材を求めていることからすれば、現状に納得せざるを得ない節もあろう。

反面、確固とした概念構成の下に用いられていたものが、⑤類以下各語群であった。端的に述べれば、横死した幽鬼は⑤・⑧類に止まり、そうでなければ⑥・⑦類へと送られるということであったが、加えて水面下に無宗教の冥界と仏道二教が支配する果報の牢獄とが一線を画して対峙していたことも、看過することができない。

最後に、本稿で扱う諸観点のうち第三点目として、唯二篇のみ記録される水界説話を取り上げ、その小説史的特異性ならびに水界発生の可能性を追うことを論の骨子とした。

そもそも水下に想定される世界観が具現化したのは唐代に流行した竜宮譚系統が主となる訳だが、これが「誌異水界」と決定的に異とする点を挙げるなら、それはそれぞれの世界観にある。例えば、唐代伝奇のなかで最も著名な「柳毅伝」の竜宮譚に流れる世界は神

仙思想に基づくものであり、俗界では思いもよらない、誰しもがあの世に望むような仙境に主眼が置かれているのに対して、『誌異「晚霞」(巻十一)、「織成」(巻十二)での竜宮は冥界の一役所としての性格を帯びたものであり、共に史的に見れば伝奇の後を受けているため神仙的傾向は否めないものの、溺死者を管理統制している点でまったく異なった世界を構築しているといえる。しかも「王六郎」(巻一)、「龍飛相公」(巻十)においては、溺死という筋設定といえども竜宮に拘引されるわけではなく、また、「西湖主」(巻五)が竜宮譚であるにも拘わらず依然として純然たる神仙譚的要素を保持し続けていることは、つまりその意味で、前記水界説話二篇は特異な存在といえよう。

ではなぜ二篇のみが仙境譚でなく冥界譚という着想でなければならなかったのだろうか。今となってはもはや想像するばかりであり、これは仮説の域を出ないのであるが、康熙九年(一六七〇)、松齡は同郷の進士孫恵に幕賓として江蘇省宝應県に招かれており、とすれば僅か二年とはいえ、この南游生活が二篇に及ぼした影響を皆無と為し難く、これを手掛かりに「聊齋詩」を交えて考察を行うこととした。

今後の研究課題としては、一旦『誌異』から離れて、作者松齡の冥界観究明の問題、並びに小説史としての冥界譚明文化の作業が残されている。

金沢文庫古文書による中世敬語の研究

— 金沢貞顯書状を中心として —

伊 藤 文 一

神奈川県立金沢文庫には、多量の古典籍、古文書が伝存している。

ここに対象とする書状も鎌倉時代中期～南北朝時代の間のもの四通以上もあり、既に活字公刊されている。この中心となすのが金沢貞顯（一二七六～一三三三）の書状である。これは、一、直筆である。二、書写年代が明らかである。三、国語史上数少ない鎌倉末期の資料である。という点で第一級の資料であり、その反面多様性に欠けるなどの欠点はあるものの、研究に価する重要資料である。特に書状という場から敬語についての好資料であり、既にいくつか指摘されているが、体系的な敬語研究はまだなされていない。それで、金沢貞顯書状を中心に敬語の体系的記述を行い、この期の敬語状況の一端を明らかにしようと思う。

敬語の分類は、①尊敬語 ②謙讓語 ③美化語 ④丁重語 ⑤丁寧語とし、宮地裕の説に従う。特に「丁重語」は謙讓語から丁寧語への変遷途上の姿と位置づけることができ、この分類項目を用いる

ことで、同一形態の敬語（例えば「候」）が時間軸にそって、意味・用法・機能を変える姿を見ようとするときには、より詳細な記述が可能である。

（敬語の体系的記述）

「尊敬語」 接頭辞「御」の用法が特徴的である。「御+体言+アリ・候」という形のみならず、「御+助詞」「御+形容詞」までみられる。一例を挙げる。

可御計有候。 御はじめ候らん。 御かたじけなく候。

また「御+形容詞」については、「御恐しく思まいらせて候」のように自らの動作に「御」を用いながらも、被動作主を尊敬する用法となっており、これはもはや「尊敬表現（動作主尊敬）」とは言えず、話し手の聞き手への敬意であるという点において「丁重表現」である。「被」は助動詞「ル・ラル」に相当するが、これによる尊敬用法は「被く給」「被く尊敬動詞」といった尊敬の重複の形を持つに至っている。

火中に入られ候。 放生会無為被遂行候了。

茶葉一裹進之候、被磨給候者悦存候。 被聞召、可示給候也。

これに対して「令く給」という形も頻繁に用いられるが、使役・尊敬以外の「令」の用法が数多く見られ、「令」が尊敬なのか、それ以外の用法（例えば動詞性表示の機能）なのか、はっきりとした判断を残す問題点である。

無御披露、内々可令申給候。 去七日子刻令他界給之由。

その他、「仰」がいまだ敬語として用いられていないと考えられることなど、論すべきところがある。

「謙讓語・丁寧語」 書状という資料の性格上、及び差出人が高位

の貞顕である点からも、話題の下位者とのあいだの行為の表現に関わる「謙讓語」の例は少なく、話し手から聞き手への敬意的配慮を表わす「丁寧語」が殆んどである。接頭辞では「拜」「愚」等が見られ、

此御礼謹拝見候了。塩屋庄今日太守御拝領候了。今朝愚状候き。

動詞・補助動詞では「存」「仕」「承」「申」「致」「参」「進」

「給」といったものがみられる。「給」については、院政期以降四段化することがあったので、その活用型が問題になるところであるが、金沢貞顕書状からはそれを明らかにすることができない。

茶せん一、給はり候は、悦存候。 見物仕候了。

禅札委細承候畢。 松皮少々令用意候之由、申給候之間。

早旦可参候。 左道之捧物進之候、御影も令進候。

無御音信候之間、不審思給候之處。 昨日之式、悦思給候。

「丁寧語・丁寧語」 金沢貞顕書状では「侍」と「候」との交替は終了し、「候」だけを用いている。

「候」の用法は、(1)貴人におつかえする、貴人のそばにいる、あ

(2)存在を表わす本動詞。被聞食事候者。

(3)状態性漢語（形容動詞相当）および名詞＋ニ・ニテと考えられるもの（デアルの意）に後接するもの。 いまに遅々候。

(4)用言連用形（動詞＋「ル・ラル」を含む）。

罪科のかれかたく候へとも。 驚人候之處。 被差置候云々。

(5)打消の助動詞「ズ（アラズ）」に接続するもの。

御祈念他事あるへからす候也。 こまかならず候也。

(6)ベシに後接するもの。 白砂多々いるへく候。 悦入候へく候。

(7)その他。 當長老御座候之上者。

このように多様な用法があり、盛期を迎えていることがわかる。

以上のごとく、金沢貞顕書状の敬語表現について、記述的、体系的把握を志したものである。このような書状のもつ或る限定的性格、即ち宛先の人物との関係が必ずしも明確でないこと、文脈に共通理解部分が省かれることが多いこと、送り仮名など省かれる文体であること、などは、精細な記述分析にかなり困難をもたらした。貞顕書状の収められる『金沢文庫古文書』は武將篇の他に僧侶篇などがあり、それらも含めたより大きい分析が必要となる。各種古記録の紙背文書など公刊されることの多い現今、その中でも極めて多量の金沢文庫古文書を中心に研究することは重要なことと思われる。

古代接続助詞における逆接の構造

—「ものの」「ものから」「ものゆゑ」を中心に—

啓 扉 浩 二 郎

世に言う接続助詞によって結ばれた叙述同士の意味関係が、必然的に順当な事態として認識されない、いわゆる逆接関係になっている場合の文脈構造や助詞機能について、形式名詞「もの」との熟合形態に於いて共通する「ものを」「ものの」「ものから」「ものゆゑ」という語の使用場面を中心に考察を進めた。「もの」は、

・世の中は空しきもの（母乃）と知る時しいよよますます悲しかり
（万・五・七九三）

といったように、前句の判断の一般性を卓示する役割で現われたと思われる。これがそれぞれの助詞と熟合した場合に、多く逆接的な解釈を要する文脈となるのである。

①「かくけしからぬ心ばへは使ふものか。をさなき人の、かかる
言いひつたふるは、いみじく忌むなるものを」（源語・帚木）

元来、接続助詞「を」は、前後件間の情意的判断を明確にするための役割として発生したと思われる。「もの」によって一般性を帯びた条件句は主体が志向する情意とは対比的なベクトルを卓示し、

「を」によって後件に、あるいは言外に本来的志向を、相当の情意をもって示すことで、前後件の意識的断層は深化するのである。

③うつせみの世のひとことの繁ければ 忘れぬもののかれぬべらなり
（古今・七一九）

ここでは「の」の機能によって前件と後件が随伴・併存的に対比されている点があげられる。そしてここでも同様に一般概念化された挿入句的な前件に対して、後件には主体の本来の情意なのである。

④月は有明にて、光をさまれるものから、影さやかに見えて、なかなかをかしき曙なり。
（源語・帚木）

「（有明の月で）光が弱くなっている（のが当然である）」という、現実の状況とはほぼ対極に一旦意識を置くことによって「影さやかに見えて」がより自然に、且つ強い情意を持ってつながり、「なかなかをかしき」を導くことができるのである。

⑤年毎に來鳴くものゆゑ（毛能由恵） 霍公鳥聞けばしのはく逢はぬ日を多む
（万・十九・四一六八）

ここでも、主体の情意は後件に置かれた「聞けばしのはく」に強く含まれる。「毎年に来鳴く」というセオリーを覆しておお余りある程に、後件で本来の情意を述べるために、「それなのに」といった接続解釈になるのだが、これらの前後件間には元来必然的な関係は希薄であるといつてよい。つまりこの類の解釈は必然的關係を要する逆接に限定されない「対比表現」とも言うべきであろう。

大伴家持使用語彙の研究

米 田 昌 代

漢語を、日本語内で用いられる中国起源の語で漢字音よりなる語とするとき、この枠に収まらない語が、国内で取り入れられ一般化するうちに、数多く現われる。和語の宛て漢字を音読した「大根」の類、音訓の混合した「蜜蜂」^{ミバチ}、「青瓷」^{アヲシ}の類、和製漢字を含む「田畠」^{デシ}の類などがあり、意義を変え、意義に応じて宛て漢字も変わるものなどが指摘されている中で、和語の形をとるものとして

本来字音で読むべき漢字を和訳による字訓でよんだもの

という一群が、漢語と和語の交渉の観点から注目されている。「白露」^{しらうろ}

露」^{つゆ}「四海」などであるが、和訓を追うのみでは漢語の特別の概念に至らない「六道」^{むいどう}「石竹」^{いしのたけ}や、語順を変えた句となる「立春→春

立つ」「開花→花開く」なども漢文の訓読に基く新しい表現とされる。これらは既に上代、万葉集に見られ、表現を豊かにしてきた。

本論文では、右の漢語の訓読和語に焦点を当てつつも、まずは、

漢語・和語についての諸説・定義の比較検討を詳細に行った。

次に、和漢に通じ、表現した量も多い大伴家持について、彼の歌と環境の関係を明らかにしようとし、年代を三期に分け、編年的記

述と作歌傾向の変化を追ひ、資料の整理を行った。

対象とする語の範囲は、歌のみならず題詞・左註・詩文・序文など家持の表現したもの全てであるが、一見漢語の形態を備え、更に漢字二字からなる熟語とする。ここには純粹な漢語の他に、漢語の訓読語、和製の漢語が含まれ、用例を抽出すると共に、それがどれに属するかを逐一検討することになる。

そして、家持の使用語の特徴を見るときの問題点として、大伴旅人・山上憶良・柿本人麻呂からの影響の有無も考えねばならない。

検討・考察した語は左の如くである。

青年の頃 若月 初月 眉引 春野 春 屋外 瞿麦

内舍人 宮内少輔の頃 雨間 早田 月夜 白露 草花 黄葉

舊宅 宴飲 秋風 屋前 露霜 世間 悲緒 精神 痛情 比

日 容花 橙橘 鬱結 秋露 牡鹿 鹿鳴 胸別 暁露 咲花

越中守の頃 春朝 春花 春苑 春暮 春鶯 春林 節候・王

頭 彫蟲・裁歌 遊芸 含弘 山柿 嗤咲 恋緒 恋情 金花

春苑 吾園

以上の個々の語の考察の上に、全体として得たのは、特徴の第一として越中守時代の前後で使用語彙の変化していること、第二に年代を追っての意味上の変化があることである。大伴池主との交流に上る作歌意識の变革、旅人、憶良の思想上の影響など、注意点がいくつも見出される。